

料を發見せず。邑城の西及北の兩方面が全部取拂はれて僅に東南の一部を存するのみとなれるは最近の事なりと覺ゆるも、其の何時頃よりかを詳にせす。聊か知り得たる所を記して探究の資となす。(本考材料の蒐收につきては加藤灌覺氏を煩したり)

地理上より見たる露國

文學士 下 田 禮 佐

露西亞平原 露西亞は世界第一の平原國である其縁には、南に高加索山脈及び其續きなるクリミアの小山脈があり、南西にはカーパシアン等の新しい褶曲山脈があり、東には古生代の後期に褶曲した烏拉爾山脈あり、西北は低波狀地をなして居る婆羅的地楯に臨んで居るが、東南は幅廣き平地で亞細亞の平原と連り、西南はダニユーブ下流の低地と、西は北獨逸平原と何れも連續して居る。然し此廣大な「露西亞平原」は決して眞の意味の平原でない、河流の浸蝕作用は、其間に狭い谷を穿ち、又は廣い平原の間に極めて緩傾斜の側面を有する谷を作たりして居る眞の平原と云へば、浸蝕作用の未だ進まない分水界附近 河岸の洪涵平原、海岸平原等である。斯く露西亞平原と云ても、今は所々窪谷盆地等が出来て居るが、此等の成生する以前の狀態を考へて見ると、此大平原は極めて緩漫な波狀の地貌を呈する臺地であつた。今、平原の中部で平均海拔二百乃至三百米、カーパシアンの前線なるヴォルヒニア||ボドリアの高地で四百米、ドネツ高原、ヴォルガ下流の沿岸、グルダイ岡地、ミンスク附近等は三百乃至四百米であるが、之等は其元の臺地の殘つたものに外な

らぬ。

かゝる大平原の成因は、元來地層が水平に堆積した爲で、從て浸蝕作用が働いても山地の様な地貌とならないのである、只此間に於て稍著しい地形は、(一)北露西亞にチマン高地と云ふのがある烏拉爾の支脈で矢張り古生代の褶曲から成て居る(二)アゾフ海の北岸からヴォルヒニアに延びて南露西亞岡地と云ふのがある、花崗岩及び片麻岩から出來て居る、(三)アゾフ海とドネツ河との間にドネツ高原がある、石炭紀の褶曲である。以上三つの隆起がある爲め露西亞平原は地形上次の四地方に分れて居る。(一)ベチヨラ盆地は烏拉爾とチマン高地との間を占めて居る、(二)中部露西亞大平原、(三)南露西亞岡地と黒海との間を占むる南露西亞平原、裏海低地等である。

右の中でベチヨラ盆地は他と異なつて、烏拉爾の地層が所々に現はれ、其他基盤は水平に累層し

て居る珠羅紀層及び白堊紀層から成つて居る。中露及び南露の平原では、其岩石は石灰岩の外粘土又は泥灰岩等から成て居る。中露では其基盤をなして居る古生層が淺い皿狀をなして中央に向て傾き、表面が殆ど水平に切斷せられて居るので、最も古い地層が外側にあつて、之から段々中心に向て新しい地層が現はれ、各地層の走向が同心圓狀に排列されて居る。即ち最西北芬蘭灣及びオネガ湖の南方に寒武利亞紀及び志留利亞紀の地層があり、遙か内陸に入て泥盆紀層がある、此は婆羅的海から狭い帶狀をなしてオネガ、ラドガ兩湖附近に擴がり、西露にてはクールランドからヴァルダイ岡地及びスモレンスクに及び、南ではニーメンドニエーブル地方で新しい地層の下に隠されて居るが尙東南に於てドン河の上流に及んで居る。次に石炭紀層はドヴィナ下流から西南ヴァルダイに至り、尙南はドニエーブルの源に達し、東はカル

ガ、トゥーラ、莫斯科を経てオカ河下流に及んで一度新しい地層に蔽はれるが、尙ヴォルガ中流に現はれ、ドネツ高原、烏拉爾、チマンでは褶曲をなして露はれて居る。一般に露國の石炭紀層は石灰岩から成て、石炭層を挟んで居る、中にもトゥーラ、カルガ兩縣、ドネツ高原、烏拉爾の前山等は其著しいものである。尙石炭紀層の間で、北極洋と烏拉爾との間には、二疊紀層が廣く堆積して居る、二疊紀 (Permian) の名も、ペルム縣の名に因んだものである、之と共に二疊三疊紀の地層がある、凡て之等層は石灰岩、砂岩、礫岩、泥灰岩、粘土等から成て、銅鑛、岩鹽、石膏等を含んで居る。古生代が終てから三疊紀の間は露西亞は陸地であつたと見ゆる。古生層が已に浸蝕作用を受けて凹凸を生じた上に、珠羅紀及び下部の白堊紀に粘土及び砂岩が堆積した、之は古生層の様に皿狀に堆積して居らない、一時は殆ど平原の全部

を覆ふたものだが、其後の削剝作用で削り去られた所があつて、今は莫斯科附近からヴォルガ中流ドヴィナ河とカマ河との間等に廣大な地積に互て残つて居る。露國の南半は上部白堊紀に水に蔽はれたと見えて、此時代の地層が、モヒレフからクルスク、ヴォロネシ、ペンザを経てヴォルガ中流に及び、尙ヴォルヒニア、リヌアニアに現はれて居る。第三紀古層も之と同じ様で、キエフ、チュルニゴフからハルコフを経てエルゲン丘陵に及び、第三紀新層は南露に限られて居る。右の次第であるから露西亞平原は地質構造上平坦に出來て居るが幾分か傾斜、隆起、削剝等の作用を受けて居る、隨て平原の基盤は決して單純な譯でない、故に其地貌及び地味にも變化がある筈である、然も之等が極めて一樣に出來て居るのは基盤の岩石を被殺して居る土性が單純な爲である。

氷と風 前述の如く、露西亞平原は各種の古い地層から成つて居るが、其後第四紀になつてから北部には氷、南部には風が働いて、厚い漂積土(氷成)、又は黄土(風成)を堆積して基盤の地層を被覆した。露西亞で漂積土に蔽はれて居る處、即ち嘗て氷の下に隠された處は、婆羅的地楯(芬蘭)から南方、レンベルグ(ガリシア)から東キエフに至り、之から北方トウーラ、ニジニノヅゴロド、カザン、ペルムを経て遙に北方烏拉爾の麓に至る線の北の全部を占めて居る。氷河は尙之から南方に二つの舌を出して居た、即ち一はドニエールに沿ひてポルタワに至り、一はオカ河、ドン河及其支流ホベル河に沿ひてドンとホベルとの會合點に至るものである。然し此氷舌は著しい漂積土を残さない、却て其跡を黄土が蔽ふて居る概して露西亞では漂積土が北獨逸の様に厚く發達して居ない場所によつては下盤を十分に被覆しない、ヴォル

ガ上流及びロシア地方では僅に島嶼狀をなして存在して居る。各氷期の時代の區別は未だ十分に研究されて居ないが、大体は北獨逸と同様に二つの漂積土帯がある、一は婆羅的海及び婆羅的地楯に接した所で、此處では氷成の地貌、即ち堆石地貌、湖水等が最もよく發達して居る。此帯は東プロシアの婆羅的湖水臺地から西露の北部を経て東北ヴァルグイ岡地に及び、尙北方オネガ湖附近に達して居る。他の一は前者の南方及び東方で、此處には氷成の地貌がなく、漂積土が平坦に擴がつて居るに過ぎない、つまり、此帯は婆羅的海を中心として氾濫した氷河が最も擴大された時代のみ氷の下に隠されたのである。極北部即ちドヴィナ、メーゼン、ペチョラ等の流域地方では漂積土が北極洋層の爲に取り除かれ、又は覆はれて居る、蓋し氷期の終頃北極洋は婆羅的海まで續いて居たのである。又之と殆ど同時代に裏海もヴォル

ガ下流低地の大部を覆ひ、其北には大きな内海があつて共に厚い地層を堆積した。概して漂積土は表面色の薄い軽い砂性土壤で、主に石英粒から成つて植物の營養素に乏しい、之はポドソルと云て北露では普通の土壤である。而し寒帯地方に入れば砂質又は泥炭質の凍土が之に代ることは勿論である。

前述の漂積土の境界線の南方は黄土に覆はれて居る、之が古い方の漂積土より新しく堆積したものであることは、漂積土は谷に切られて居るが、黄土の方は谷の形の通りに堆積して居るので明かである。厚さは二十米に達する處もあるが、處によつて下盤の岩石が露出して居る處がある、甚しきは黄土は只斑點狀に存在するに過ぎない處もある。此黄土地方の一部に所謂黒土帯と云ふのがある、南露を西南西から東北東に貫いて、サラトフ、オブシチアイシルト方面に及んで居る。黒土帯で

は表面の土壤が厚さ一米位腐植土で黒くなつて居る、之は草野の草が堆積して腐たものである、此帯が南露の穀野として聞えて居る所で、今は小露西亞領として獨逸に糧食を供給して居る。黒土帯の南即ち黒海に接した所は純粹の草野土で、更に東南裏海の低地に入れば沙漠性となる。

水流 露西亞の様に地層が水平に重なつて居て其の上にな様な表土が蔽ふて居る所では現在の地貌は水流の作用で決定される。婆羅的海及び北極洋斜面と黒海、裏海斜面とを分つ主要分水界は、カーパシヤンの麓から北走し、一度北獨逸低地の續きの窪地で切斷されるが、それから廣き隆起帯なる西露岡地に續いて、此上を更に東北に走つて湖水臺地及石炭紀層地方に至り、之から北ヴルダイ岡に續き、終にオネガ湖附近の低地に下る。分水界は之から東南に向て湖水多き平野の間を通りぬけてヴォログダ市附近で北露高地に出で、東の

方烏拉爾山脈に達して居る。

此主要分水界から、一般の傾斜に従て、ペチヨラ、ドイナは北極洋に、ネヴァ、ヂューナ、ニーマンは婆羅的海に朝して居る。分水界が西北に偏して居るので、南及び東南に流れる河には大きいのがある。ドニエーブルは大きな沼澤性低地から水を集めて来る、此低地はワイヒゼル（ヴィスチユラ）河中流の低地と連続して居るもので、ドニエーブルの支流ブリベットが其中を西から東に流れて居るドニエーブルは尙廣い低地を東南に流れる、此低地は此河の作たもので、之が中露の高原と南露岡地とを分て居る。北南露岡地と云ふのは前にも述べた花崗岩岡脈及びドネツ高原から成て居るが、尙ボドリヤ、ガリシアを経てレンベルグカーバシアンに延びて居る。南露岡地の南には、南露臺地があつて、東南黒海に緩斜し、ドニエストルとブーグとは此臺地の間に狭い谷を穿て同方

向に流れて居る。ドニエーブルとドネツの間で、ドネツ高原と中露高原と續いて居る、此の中露高原と云ふのがヴァルグイから續いて來て居るのでヂューナ、ドニエーブルとヴォルガ、ドンとを分つ分水界をなして居る。ドン河は中露高原及びドネツ高原の東の縁をなしてドニエーブルと同方向に流れる。歐州の最大河ヴォルガは中露から來るオカ、烏拉爾から流れるカマ等の大支流を合せて大きな盆地の中を流れて居る、此の盆地は中露高原と北露岡地との間にあつて、西北はネヴァ河の低地と續いて居る、然し決して單一な低地ではないので多くの河谷が集まつたものである、即ち窪地は河自身の浸蝕作用で出來たものに外ならぬ。此河の支流オカ河とドン河との間には兩側を河に浸蝕されて廣い鞍狀地が残て居る、此鞍狀地は中露高原とヴォルガ高原との連鎖をなして居るものでヴォルガ高原は漸次東に高くなつてヴォルガ河

畔に高い險崖をなして終て居る、此險崖はニジメ
ノヴゴロドからツアリチンに達して、露西亞平原
中で此處ばかりは幾分山らしく見ゆる。

要するに前記諸水の河谷は、元來河自身の浸蝕
作用で出來たもので原生的の窪地又は地質構造上
の谷でない、即露西亞平原は單に河の浸蝕作用で
高地と低地とに分れたもので、其高地と低地との
別は基盤の地質構造又は土性とは何の關係もない
植物界 露西亞は氣候及び植物界からは次の三
帯に分れる。

(一) ツンドラ帯は極めて寒く、冬季は九ヶ月に互
り、土地は永久に凍り、樹木生せず、耕作は出來
ない、狩獵、漁業及び馴鹿遊牧が行はれる、此帯
は北極圏以北の全部から尙斑點狀をなして南方に
延び、全ベチヨラ流域を包括して居る。

(二) 森林帯は更に西比利亞針葉樹林帯（オネガ湖
—カザン線の東）と中歐混合樹林帯とに分れて居

る。此は雨量五百耗以上の地で、北露中露の全部
を包括し、南は漂積土帯の南界に及んで居る。本
帯は冬季半歲に跨り、寒威強く雪深く、夏は雨量
が多い。其北部には所々沼澤を交へた廣大な原始
林があつて、其林空中には貧しい耕地牧場が點在
する、南部になると森林の間に廣大な耕地があり、
それが南に至るほど多い。然し森林の經營などに
は餘り注意しない、多くは原生林で、樅類、松類、
榲類、白樺其他の落葉樹の混合林で下生が多い、
北方及び東方になると針葉樹及び白樺が増して來
る。

(三) ステップ帯は冬季比較的短く、雪少く、夏は
炎熱燒くが如き處である。森林帯からステップ帯
への移りかはりは漸次であつて、其間に中間地帯
と云ふべき處がある、此中間地帯が前述の黒土層
地方に當る。之から南は眞のステップとなつて雨
量少く耕地乏しく、終には一部遊牧地として利用

さるゝ荒涼たる草原となる。作物は森林帯では大麥、黑麥であるが此帯では小麥を主とし、尙南方には玉蜀黍、瓜、葡萄等があつて、特に中露では果樹の栽培が盛である。

文化 單調と畫一とは露西亞の自然界に於ける著しい特徴である、此大平原には、民族、文化、經濟、國家等の發展擴張を阻止する何等の障害物がない。自然に存して居る著しい對照でさへ、其間に存する極めて緩漫に移りかはる中間地帯の爲に其鋭さを失てしまふ。森林とステップの如きは随分甚しい對照であるが、南方は北方の材木を必要とし、北方は南方の穀物に依頼するから却て全體の調子を畫一ならしめる。距離の隔絶、森林、沼澤、砂漠等で交通の妨げらるゝ此平原では、優秀なる水路網が畫一を助ける、乃ち露西亞は同一の民族、同一の國家の支配の下にある様な自然的條件を具備して居る。外界から封鎖されて居るこ

とも其の自然界の特徴である、周圍の海すら内海の性質を持って居る、是露西亞の住民が數千年間南方及び西方の文化とあまり接觸せず、特有の歴史と特殊の沈滞した文化とを形成した所以であらう

露西亞は三方面から文化を入れた、亞細亞民族はステップに馬を驅て屢侵入し來て、露西亞人の血液、精神、國家組織に著しい影響を残して、イスラムも亞細亞民族と共に入て、十六世紀までは、露國は東南の回教國と西北の耶蘇教國とに分れて居た。希臘の植民は黒海方面からビザンツの文化を齎した、今日宗教、文字、建築等に其影響の大なることは何人も承認する。所謂「露西亞風」なるものはスラヴ固有の文化と此中亞_{II}ビザンツ要素とが抱合したもので、韃靼の羈絆を脱して後に完成したものである。近代に至て西歐の文化は西露に浸潤し始めた、是露國の受けた第三の文化である、瑞典のワレーゲルは早く海を越えて第一の

露國を建て、獨逸騎士團及び商人は婆羅的沿海諸州を拓殖し、波蘭は數百年間西部を支配した、如斯西露が早く西歐の文化に浴せるに係らず内地は依然鎖國状態が續いた、露國の開発は新世界の發見より後れた。第十六世紀の半頃に獨人ヘルベルスタインが其著書で露西亞を紹介してから英國とドヴィナ河口との間に活潑な貿易が開かれ、此處に露西亞の西歐化が始まつた、其後十八世紀に彼得大帝の婆羅的沿海諸州獲得によつて直接西歐の文化を輸入し得るに至り著しい文化の進展を見る様になつた事は人のよく知る所である、然し今日尙西歐の文化は上流社會に限られて、之が中流以下に滲み込んで居る中亞||ビザンツ要素と十分に融合して居らない。

民族 北方の森林と南方ステップとの間に民族分布上著しい差違がある、森林帯には開闢以來定住して農業を營む種族が住んで居る、ステップに

は種々なる騎馬民族が現滅した。森林帯で云ふと婆羅的の海に接して古くからレット族、リシアニア族が居る、其東、即北露の西部には、ヂユーナ、ニーメン、ドニエーブルの上流に沿ふてスラヴが居る、之が今日の大露西亞人及び白露西亞人である。其南、ドニエーブルの中流に同じくスラヴ族が居る、之が小露西亞人である。イルメン湖畔のノヴゴロドとドニエーブル河畔のキエフとは已に中世初期に於て此等兩露西亞民族の文化の中心として著れた。此露人はワレーゲルの下に始めて國家的生活に入り、九、十世紀にはビザンツから耶蘇教を受け、漸次森林地方に殖民して、其地方に住んだフィン族を壓迫し、南方では遊牧民族をステップに驅逐した。今日の大露西亞人と云ふのはスラヴに烏拉爾阿爾泰系民族の混合したものである。十三世紀に蒙古人が疾風の如く、此平原を荒した、之と共に多くの亞細亞民族、所謂韃靼人が

入り込んだ、爾來二百餘年蒙古韃靼の支配に呻吟したが、其羈絆を脱してから十六世紀になつて韃靼を壓迫し、烏拉爾を越えて將來太平洋岸まで植民する基礎を立て、二世紀の後には南露の征服及び植民に成功した。西方では自分より優秀な文化を持た民族を征服して之に模倣した。かくて露人は其自然的國境に達するまで境界線を進めて之を占領した。然し彼等の間には尙烏拉爾阿爾泰語系の民族が残つて居る。其中約三百五十萬は烏拉爾派である。之は次の諸族に分れる。(一)サモエド族はベチヨラ流域に馴鹿を牧して居る蒙古人に似た種族である。(二)フィン族は東部(ウグリアル、ベルミール、ヴォルガフィン)と西部とに分れる。ウグリアルは北部烏拉爾に居て、蒙古人種の特徴を備へて居る、言語上はマヂアールと關係がある、狩獵民族なるオステアーク、ヴォーグル等は之に入る。ベルミールはベチヨラ上流からカ

マ河附近に居て、ヴォルガフィンと共に早く露人の間に交て正教に歸依し、露西亞化して、集團的聚落を作て農耕を營んで居る。ヴォルガフィンにはカザン附近のヴォルガ沿岸に住するもので、昔し光輝ある國家を建てたヴォルガブルガールの餘蘗と云はれて居る。西フィンと云ふのは芬蘭に居る狹義のフィン及カレリールの外、インゲルマンランド及びヴァアルダイの東側に居るチュード人、エストランド(エストニア)に住んで、新教を奉じて居る、エスト人、リヴランド(リヴォニア)及びクールランドに居るリヴ等を含む。

阿爾泰派の亞細亞人種は土耳其族に由て代表されて居る、之は元來蒙古人の侵入と共に來て蒙古人から露西亞の支配者に指定されたもので、俗に韃靼人と云はれて居る、其遺藁約二百五十萬はカザン市及び其東方に商人農民として残り、尙雇人勞働者として全露に散在し、クリミアには農

民牧者として存し、純粹の遊牧民なるノガイ韃靼は裏海西方のステツプに居る。但し是等の中ノガイだけは純粹の土耳其族で、クリミアの韃靼は希臘人や伊太利人などが韃靼人と混和せるものらしい、パシユキルはやはり韃靼に入れられるが、元

來はフィンで韃靼の言語を用ゆるものであらう、主に農業狩獵又は勞働に従事する。キルギス族は裏海低地に居る。凡て之等土耳其族は回教を信じて居る。カルムク族は純粹の蒙古人で、第十七世紀に移住し來て、ヴォルガ下流の西方の草野に遊牧し、佛敎を信じて居る。猶太人は西南部に波蘭を除いて尙四百萬も居る、其居住職業等の自由を制限され、肉体上、道徳上悲惨なる境涯にある事は何人も知つて居る。獨逸人は婆羅的沿海諸州で地主又は市民となり、尙十八世紀にヴォルガ河畔及び南露に農業植民をなし、全國各地に商人、工業家として生活して居る。ベサラビア(西南隅)に

は羅馬尼亞人が居る。又クルランド、南部リツランドのレット人は新敎徒、ニーメン下流に居るリスアニア人は舊敎徒で共に廣義ではスラヴに入る。又以前波蘭領の部分には波蘭人が居る。

之を要するに露西亞の中堅となるのは云ふまでもなく大露西亞人で、遲鈍蒙昧な白露西亞人及び輕快詩的な小露西亞人も之に屬する、國境地方の異民族は大露西亞人の發展で包擁併呑されたものである、然し元來が鈍重で、亞細亞人的の服従心、犠牲心に富み、侵略雄圖を好むが、其の文化的、社會的、經濟的の基礎は極めて薄弱で、個有の光輝ある文化を持たない民族である、それが如何にして異民族を同化し得るか、果して今回の革命で之等の地方は土崩瓦解した、殊に早くから優等な西歐文化に浴して居た西露の地方は波蘭、芬蘭を始めとして盡く原形の儘吐き出された、つまり露西亞人は百有餘年間之等民族の地を鵜呑みにした

儘で少しも消化しないのだ。序であるが哥薩克と云ふのは露西亞人の社會的集團で種族でない、元來ステツプ民族に對し國境に集められた逃亡者罪人等が騎馬の國境守備兵を組織したもので、之に小露哥薩克と大露哥薩克とある、前者は他の植民と混じて居るが、後者は今尙ドン、クバン、テレク地方に特有の集團を作て居る、南部烏拉爾の東、西北利亞の南境にも哥薩克が居て、中には亞細亞人をも交へて居る。

人口の密度は波蘭で一方軒八十五人で、北獨逸平原地方と大差ない、南方國境のポドリヤ（七十五人）之に次ぎ、南部ヴォルヒニア、小露西亞等何れも五十人を超て居る。つまり黒土層地方は人口が稠密で、各方面に減じ、中露、西露、南露の大部分は二十五人以上、ブリベツト流域及び黒海岸は十一三十人である、烏拉爾南東部、北露、裏海盆地などは何れも十人未滿である。死亡率大

く、外國からの移入民はないが、出生率が大きいので人口の増殖は甚だ速である。

經濟 自然界の條件は經濟生活を決定して居るツンドラ帯では馴鹿の遊牧、狩獵、漁業等が行はれ、其他北緯六十度までの北露では、林業毛皮獸狩獵、漁業等をやつて居る、隨て村落は河畔に多い。森林帯では穀物殊に黑麥、燕麥及び蕎麥を産する外牛馬の牧養が盛である。然し勿論地方の需要を充すに過ぎない。家庭工業は一般に發達し、近時中露には大工業も見べきものがある。森林帯では家屋の建築、長い寒い冬季の暖房、汽關車機械の燃料にすら材木を用ふるので、南部では木材は自給するに足りない。此地方では村落は概して小さく、幅の廣い悪い道路の兩側に木造の小屋が並んで居るもので、村落と村落との間は屢遠く相離れて居る。婆羅的沿岸諸州では集約的農業が行はれて居るので、農産物の輸出が夥しい、穀物

の外、亞麻、馬鈴薯、果實を産し、牧畜亦甚だ盛である。此地方では聚落は多く孤立家屋(莊宅)である南部の黒土帯は殆全部穀物の耕作に用ひられ穀物の輸出が甚大である、中にも西部は小麥、ゾオルガ河地方は黒麥が多い。西南部は加ふるに甜菜及び纖維用並に製油用植物を作り、肉用家畜の牧養も行はれ農産工業亦見るべきものがある。甜菜糖の如きは其産塊洪國に匹敵し、重要な輸出品となつて居る。南方の眞のステツプに入ると粗放的の牧畜が行はれ、玉蜀黍、瓜等の農産がある。ベサラビア、クリミアでは葡萄を作り、裏海附近の荒野では亞細亞遊牧民族が家畜を牧して居る概して南露は馬及び羊を主に牧して居る。一般に黒土帯及びステツプ地方では、水が少い爲、聚落が森林帯よりも大きく、遠く離れて居る、材木が缺乏して居る爲、燃料は糞と荆棘で、機械や河蒸汽にすら之を用ひ、家の建築は白煉瓦を使ふ。

要するに農牧は國民經濟生活の基礎で、耕地は全面積の二七%、草地牧場は一五%を占め、國民の八割は之に従事し、穀物は殆全輸出額の半に達し、亞麻、砂糖、畜産物亦主要輸出品である、木材の輸出は穀物に次で居る。然し農業は社會的、技術的缺陷の爲甚發達して居ない、大露西亞では、土地の大部分がミールと云ふ部落共有地である爲、耕作者は直接自家の利害に關係しないので耕作に努力しない、加ふるに農奴廢止の結果重い租税の負擔があり、農民は無教育である。從て其耕作法は婆羅的沿海諸州の外は極めて粗放的で、殆肥料をやらない掠奪的方法である。夫が爲豐沃な黒土地方すら漸く收獲率を減じ、不作饑饉屢至り、ゾオルガ附近では特に甚しい。河や海岸では漁業が可成り盛であるが、希臘敎國で斷食期に需要が多いので、需要を充すに足りない。鑛産はあまり多くない、露本土の三炭田は地質の項に述べた

が、其他上シレジア炭田の續きが露領波蘭に現はれて居る。鐵は可成り澤山出て、烏拉爾地方の鐵工業は見るべきものがある。其他シレジア境界の亞鉛、鉛、烏拉爾の貴金屬、ドネツ高原、裏海盆地中の草野湖、南露のリマン等では鹽を産する工業は關稅の障壁で保護せられ、最近數十年間外國殊に獨逸人及び獨逸の資本で進歩した工業地は鑛山地方の外、波蘭、婆羅的沿海諸市、莫斯科附近で、機業特に綿工業が主である。概して露西亞の工業は、石炭と水力との缺乏で著しく發達を阻害される。

外國貿易では二重の方面を有し、西方には原料品、半製品を輸出し加工品を需め、東方に對して之と反對である。貿易は九割まで外國の船舶に由て行はれ、商船隊は甚だ少い、海から封鎖された所に居る露人は全然海上生活の嗜好と能力とを缺いて居る。

交通も未だ甚だ進歩して居ない。鐵道網の密度は那威を除く凡ての歐洲諸國に劣り、其長さも獨逸に及ばない。國境の頗る長きに係らず之を越ゆる鐵道線は十八を數ふるに過ぎない、即ち露領亞細亞へ四線、芬蘭へ一線、獨へ七線、墺へ五線、羅馬尼亞に一線を出して居る。莫斯科は國內交通線の中心をなして居る。之からベトログラード行、リガ行、ワルソウー伯林行、ワルソウー維也納行、カルガーホメルーワルソウ行、トウラーセヴストボル行、クルスクーオデッサ行、ハルコフーオデッサ行、リヤザン高加索行、チェリヤピンスク西比利亞行、サマラータシュケント行、アルハングルスク行等がある。尙ベトログラードからヴィルナを経てケーニヒスベルグ行、及ヴィルナからワルソウ行などがある。概して鐵道は汽車の數が少く、速力亦甚だ緩かで時間を空費することが多い、陸路交通には尙馬車の使用が盛である。露

國は又優秀な水路網を持つて居る、諸大河は凡て上流まで溯航すべく、中に最も重要なヴォルガ河とネヅア河とは三つの運河で連絡され、又両河ともドヴィナ河と連接し、又ドヴィナの支流ヱイチエグダとヴォルガの支流カマ河とも續いて居る、かくて東北部の諸水は婆羅的海、北極洋、裏海の間の一の連絡した水路網を作て居る。西では、プーグ、ニーメン、デューナはブリベツト、ドニエーブルと連絡し、婆羅的海と、黒海とを連ねて居る。然し此水路網も長い冬は氷に鎖され、春は雪解けの洪水多く、其利用は短い夏に限られて居る。

結論 之を要するに露西亞は實に矛盾の多い國である、其地質は甚だ古いが、夫があまり褶曲されないで平原をなして居る、其人種は古くから著れて居るが文化は未だ若い世界史に首を出したの十八世紀に過ぎない。廣大な領土と雑多な民族とを包有して居るが之を融合同化した譯でない。

人口は稀薄で利用すべき資源は多いが人民は無智と貧困に泣いて居る。其上流社會は西歐の文化に心酔して居るが人民の七割は讀み書きすら出來ない。白人には相違ないが其血統、思想、傳説に於て多くの亞細亞的要素を交へて居る。所詮露西亞は其自然地理の示すが如く歐亞の中間地帯 (C. Bernhard's) である。西方及び海上に封鎖された獨逸は今此大きな若い國を抱き込んだ、獨逸の文化、資力を以て果して其蒙を啓き、其資源を開發し得るか否か。吾人が今其地理の概略を述ぶるのもあながち無益の業であるまい。